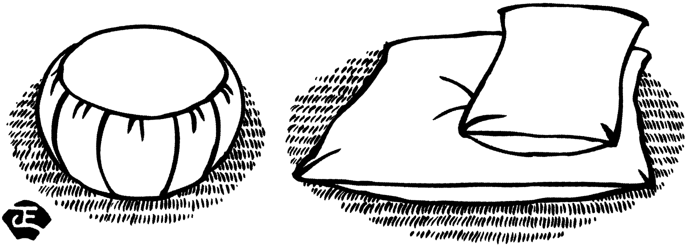
禅房十事　蒲団



画：正親里紗

舘　隆志

今回は、「禅房十事」の中で二番目に取り上げられている「蒲団」を紹介します。「蒲団」と書いて「ふとん」と読みます。

「ふとん」というと、皆さんは寝具の布団を思い浮かべると思うのですが、「蒲団」は坐禅の時の敷物のことをいいます。それが、日本語では寝具の意味に変化し、当て字として「布団」の字が用いられるようになりました。そして、その意味が変化したまま、「座布団」などと用いられるようになるのです。「座布団」は「座蒲団」とも書くのですが、本来坐るための「蒲団」に蛇足ともいえる「座」を付けているのですから、なんだか面白いですよね。

要するに、皆さんが毎日寝ている「布団」は、もともと禅の道具「蒲団」から転化した言葉だったのです。

江戸時代の妙心寺の住持で、「学聖（がくせい）」と呼ばれた無著道忠（むちゃくどうちゅう）禅師という僧侶がおられま

す。曹洞宗でも臨済宗でも、禅を研究する者なら誰もが憧れるような、そんな並外れた学僧です。無著禅師は、「日本では俗に眠単（敷き布団）を蒲団だと理解しているが、まったく本来の意味を忘れている」と言っています。江戸時代には、すでに「蒲団」と「布団」を取り違えていたのでしょう。

蒲団は、もともと蒲の葉で丸く包んだ敷物のことを指します。この敷物の上で（もしくは尻の下に敷いて）坐禅をしていたようです。蒲団という二文字のうち、後の団の字には丸い物という意味があります。たとえば団子といえば、穀物の粉を使って作る真ん丸の「お団子」を思い浮かべますよね。

蒲団に蒲の葉を用いたのは、中国で禅宗が興った当初のことだと思われます。中国の南宋時代や、日本で同時期の鎌倉時代にどのような材質であったのかは史料には残されていません。

ただし、鎌倉時代後期に活躍した曹洞宗の瑩山紹瑾禅師が著した『坐禅用心記』という書物には、「蒲団〈経亘一尺二寸、周囲三尺六寸〉」と、蒲団の大きさが記されています。経亘とは直径のことだと思われ、直径は約三六㎝、周囲は約一〇九㎝ぐらいの円形の蒲団であったと考えられます。

瑩山禅師の先生である徹通義介禅師は、永平寺開山で曹洞宗の開祖である道元禅師の直弟子です。この徹通禅師は、中国に渡って南宋時代の禅林の様子を学び、京都・鎌倉の臨済宗寺院を行脚して当時の禅寺の情報を集めました。さらに、瑩山禅師自身も臨済宗の僧侶にも学んだ方ですから、瑩山禅師の残した情報は、鎌倉時代の禅寺の実情を反映したものでもあるのです。

この蒲団については、現在は臨済宗では「単布団」、曹洞宗では「坐蒲」と呼んでおり、その形についても大きく異なっています。

曹洞宗の坐蒲は厚みのある尻に敷く円形なのに対して、臨済宗の単布団は平たい正方形のいわゆる座布団の上にその半分サイズの尻敷き用の布団を置くか、あるいは長目に作った長方形の座布団を同様の形に折り曲げて、その上で坐禅しています。

ところが、無著禅師は蒲団について「其の形団円」と記しています。また、江戸時代に活躍した禅画で著名な白隠禅師が、蒲団を描いていますが、この時に描かれた蒲団は円形です。したがって、この頃の妙心寺ではどうやら丸い蒲団を使っていたようです。ただし、いつから四角形の単布団を使うようになったのかは、現在のところわかっていません。

一方、道元禅師が著した『普勧坐禅儀』という書物には、「厚く坐物を敷き、上に蒲団を用ゆ」とあります。蒲団の下に坐物を用いていたようです。坐物は具体的にはわからないのですが、臨済宗と同様、坐蒲の下に座布団を敷いているようなイメージでいいかと思います。

現在の曹洞宗では、指導者は坐蒲の下に座布団を置くのですが、修行僧は坐蒲のみを使います。坐蒲の下にも「坐物」を敷く方が古えを留めているようです。

お釈迦さまの時代は草を敷いていただけでしたが、中国では蒲団を用いて坐禅をするようになりました。そして、日本でもこれを受け継ぎ、後世に伝え、現在でも蒲団を用いて坐禅をしているのです。すなわち、蒲団は坐禅修行を象徴する道具といえるでしょう。

「禅房十事」の二つ目に蒲団があるのは、禅寺で大事なのは坐禅修行であるということを伝えたかったのだと思います。

舘　隆志（たち りゅうし）
一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭渓道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。